

現代短歌分類辭典

第九十五卷

津 端 亨 編 纂

津 端 亨 編 纂

現代短歌分類辭典

第 九 十 五 卷

現代短歌分類辞典

95

昭和五十九年三月一日発行

定価 二〇〇〇円

著者発行
兼印刷者

津 端 亨

〒111

東京都台東区鳥越一―十一―八

発行所 現代短歌分類辞典刊行所

代表 津 端 亨

振替 東京 三―九三―一四番
電話 〇三(八五)九八六九番

(九十五卷)

頁數 一 七二 〃 〃 〃 〃 七三 〃 七四 〃 〃 〃 〃 七五 〃

[illegible]

いひーときーて	いひーときーぬれーば	いひーとく	いひーとく	いひーとく	いひーとほさーざる	いひーとほしーたる	いひーとほす	いひーとほすーべき	いひーとめーて	いひとよ	いひーながら	いひーなし	いひーなしーがたき	いひーなしーて	いひーなしーぬ	いひーなす
二	一	一	四	一	一	一	二	一	一	四七	三	一	一	一	一	五

〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

いひーなせーど	いひーなだめーつつ	いひなづけ（許嫁）	いひーなづみーたる	いひーなづみーをれーば	いひーなづむ	飯南野	いひーなーば	いひーなーまし	いひーなーむ	いひーならし	いひーならしーをれーば	いひーならしーけむ	いひーならしーたる	いひーならはさーれ	いひーならはしーつつ	いひーならはす
一	一	五	一	一	一	一	五	二	一	二	一	一	一	一	一	一
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

いひーにーけるーらし	いひーにーけるーかな	いひーにーける	いひーにーけり	いひーにーけらしーも	いひーにーけむ	いひーにくき	いひーにくからーぬ	いひーにくい	いひーにーき	いひーにーきーて	いひーなれーむ	いひーなれーて	いひーなれーつ	いひーなれーたれーば	いひーなれーし	いなりに
一	二	八	四	二	一	一	一	一	二	一	一	一	一	一	二	三

一〇五	一〇三	一〇二	九九	九七	〃	〃	九七	九六	九四	〃	九三	〃	〃	〃	〃	九二
-----	-----	-----	----	----	---	---	----	----	----	---	----	---	---	---	---	----

いひーのこしーおくーべきー	いひーのこし	いひーのこさーまく	いひーのけーて	いひーのがれーるーし	いひーのがれ	飯の浦	いひーぬれーど	いひーぬる	いひーぬーべし	いひーぬーべき	いひーぬかーんーとーて	いひーぬ	いひーにーつつ	いひーにーたるーらし	いひーにーたり	いひーにーし
一	四	一	二	一	一	一	一	三	一	六	一	一七	五	一	二	二
一三六	〃	〃	〃	〃	一三五	〃	〃	〃	一三四	〃	一三三	〃	一〇八	〃	一〇七	〃

いひーはてーし	いひーはつーべき	飯鉢	いひーはじめーし	いひーはじめーし	いひーはじむ	いひーはうだい	いひーはーいへーど	いひーはーいでーねーど	飯野山	飯野の山	いひーのこす	いひーのこしーたる	いひーのこしーける	いひーのこしーけり	いひーのこしーけむ
一	一	一	一	一	二	一	一	一	二	三	一	七	一	一	一

〃	〃	〃	〃	〃	一九	〃	〃	〃	二八	〃	〃	三七	〃	〃	〃
---	---	---	---	---	----	---	---	---	----	---	---	----	---	---	---

いひーはてーて	いひーはなたーば	いひーはなたーむ	いひーはなたーるる	いひーはなち	いひーはなちーきーたり	いひーはなちーけり	いひーはなちーたる	いひーはなちーつつ	いひーはなちーなーば	いひーはなつ	いひーはなつ	いひーはなつーまで	いひーはなつーらむ	いひーはなてーど	いひーはべる	いひーはやさーれーて
一	一	一	一	七	一	五	二	二	一	二	一三	一	一	一	一	一
一三〇	〃	〃	〃	〃	一三一	〃	一三二	〃	〃	〃	一三三	一三四	〃	〃	〃	〃

いひやうなき	一	〃
いひやうなく	一	〃
いひーやまーぬ	一	〃
いひーもーやらーねーば	一	〃
いひーもーやらーれーず	一	一五二
飯盛の峠	一	一五二
飯盛山	二	〃
いひーもーわすれーじ	一	〃
いひーやーあはーむーか	一	一五三
いひやう	六	〃
いひやラーもーなき	二	〃
いひやうーもーなく	三	一五四
いひやうーもーなし	一	〃
いひーやーしーつーらむ	一	〃
いひーやすからーず	一	〃
いひーやすき	二	〃
いひーやすし	一	一五五

飯山(高山地方)	一	一五五
飯山	六	〃
いひーやまーぬ	一	一五六
飯山町	一	〃
いひーやむ	一	〃
いひーやめーし	二	〃
いひーやめーて	二	〃
いひーやめーながら	一	一五七
いひーやめーにーけり	一	〃
いひーやめーぬ	二	〃
いひーやらーず	一	一五七
いひーやらーば	二	〃
いひーやらーまし	一	一五八
いひーやらーむ	三	〃
いひーやらーん	一	〃
いひーやりーがたき	一	〃
いひーやりーし	四	〃

いひーやりにたれーど	いひーやりーて	いひーやる	いひーやれーど	いひーやれーば	いひーゆきーし	いひーゆく	いひーよこさーねーど	いひーよこす	いひーよどみーたり	いひーよどみ	いひーよどみーたる	いひーよどみーつつ	いひーよどみーをり	いひーよどむ	いひーよりーし	いひーよりーて
一	三	三	一	一	三	一	一	二	一	一	三	一	一	一	二	三

一五九	〃	〃	一六〇	〃	〃	〃	一六一	〃	〃	〃	〃	〃	一六二	〃	〃	〃
-----	---	---	-----	---	---	---	-----	---	---	---	---	---	-----	---	---	---

いひーよりーにーけり	いひーよりーぬ	いひよる	いひーよれーば	いびる	おひるぜんご	いひーわかーぬ	言 訳	言 訳	いひわけ手紙	いひーわすれーたる	いひーわすれーぬき	いひーわたさーれーぬ	いひーわたしーて	いひーわたす	いひーわぶる	いひーゐーき
一	一	二	一	二	一	一	二三	一	一	一	二	一	一	一	一	一
一六三	〃	〃	〃	一六四	〃	〃	〃	〃	一六七	〃	〃	〃	〃	一六八	〃	〃

いふ (二ヶ所)	一三	一八〇
⑤ いふ	一三八四	一八一
④ いふ	二四二	二八八
③ いふ	四〇九	三〇八
② いふ	六四	三四二
① いふ	二三	三四九
いふ (到置法)	一	三五一
いふ (中間)	一八	〃
(か) いふ	二六	三五二
(かも) いふ	一	三五五
(こそ) いふ	一	〃
(ぞ) いふ	九〇	三五五
(や) いふ	四	三六三
(やは) いふ	二	〃
合 計	四、〇〇三	首

いひて【動詞・助詞】

雨の音のはげしさいひてやがてまた人の眠の静かにつづく

林 圭子

アメリカをリアルに見よと君云ひて歌のわかれをすすめたりしか○

井 出一太郎

あやまりをひとたび言ひてさとらざる昂りごゑの聞けばさびしく○

村 田 利 明

あやわがた年魚市瀉の碑にむかひをれば牡丹ほめて独言いひて通る声すも④(秋風抄)

松 田 常 憲

あらはには病むとなければどみづからに春の愁をいひて籠らふ②(角川文庫) 吉 野 秀 雄

あらひざらひ着物出さしめこれだけがわがのかといひてさめたり夢は⑫(秋の声) 佐佐木 信 綱

アララギはわが雑誌ゆゑ余所行のこころ要らずと云ひて可なりや⑬(白き山) 斎 藤 茂 吉

蟻地獄の絵本覚えぬし幼な子が蟻の牢屋と言ひて砂掘る②

高 安 国 世

ありと言へばあり無しと言へば無き未来ぞと己に言ひて悲しみもせず⑬

松 村 英 一

ありなれ みなみ鴨緑の上流の山の月夜なりあにしづけしと言ひて来にしかな○

金 子 信三郎

あるがままにあれば安けしなど言ひて意欲のうせし夜々をねむりぬ③

生 方 たつゑ

いひて

あるじはと人もし問はば軒の松あらしといひて吹かへしてよ○（現代短歌全集）

橘 曙 覧

あるじ召されし家にたまさか笑ひ声洩れきこえしといひて安らぐ④

小 宮 良太郎

アルバイト少女は明るくもの言ひて鎌音かるく笹刈りはじむ○

生 駒 あざみ

吾をおきて死の旅に立ちし田中和平馬鹿な奴めと言ひて涙す⑮

松 村 英 一

揖斐川の底よりふかき地下水を誇りにいひてこの市民達⑥

四 賀 光 子

いひて寄らむ親のなければ兄われを力としまた頼みともする⑥

松 村 英 一

いひて笑ひ言ひてはわらひ月の夜をわが思ひ出は妻とするかも①（現代短歌大系）

佐 伯 仁三郎

言ふだけは言ひて電話を切りたれど心しばらく穏かならず③

村 野 次 郎

いふべきはいひておくべしわが企画成るはおそらくわがあらぬ後④

高 橋 希 人

家にやといひて入来る友だちのすくなくなれるよはひかなしも○

井 上 通 泰

家鼠にな引かしめそ徳一は小さきものと言ひて笑ましき○

関 得 一 郎

いまだにもお福といひてめでてこし親につかへしころよりして⑩

安 江 不 空

今の時に言ひて憚るところなし天が下なる大き亜米利加④

今の代よの不安をいひて少女あり時にやさしき表情も見す④

芋の葉のすがれに白く置く霜の今朝はしるしと子に言ひて過ぐ①

いやいやといふことをのみ知れる子のいやいやといひて泣きてやまずも⑥

嫌いやといふ兒の顔を拭くふくならばやがてよき兒にならうと云ひて①

入日入日まつ赤な入日何か言へ一言言ひて落ちもゆけかし②

因習の強きを言ひて嘆けども妻もてば君もただの村人（朝日短歌一）

うき名をばたてしといのる白鬚の知らずとのみとのみもいひておかまし①

歌会にこやるといひて笑はれて書きしこやるの解は正しも①

うちつけにもいひてゐる傷兵に衛生兵はあたたかく笑みぬ（多磨四）

うちとけて話の出来る君なれば永く我まを云ひに来にけり（美穂）

うつくしき首よといひてほめたれど夏の女のほめどころなり①

いひて

島木赤彦

安田章生

野田孝之

窪田空穂

小名木綱夫

今井邦子

宇田優宣

正岡子規

正岡子規

乾節

豊島晃

清水比庵

いひて

うつくしき御袖といひてよりながら涙ぬぐふになれしわれかな①

美しき白髪よといひて中年婦人立ちて電車の席ゆづり給ふ⑦

うつくしくなりしも夢のなかのこと怪しと云ひて目覚めたまふな（水莊記）

うつくしく降りたる雪を真少女のごとしといひて讃めつつぞ居る（小園）
斎藤茂吉

うつし身のひとみ濡れつつ語れどもあはれを言ひて泣かざりしかも④
今井邦子

現身はかくの如きかいまさらにあはれといひて思はつきず②
臼井大翼

現世うつしよにうれしきことは数あらずうちつけに言ひて友の手を握る③
山下陸奥

現世のわかれは愛かなし妻にいひて君たたかひに召されたりけむ①
南原繁

うつつなげに手をしつかねてありければ遊ばなといひてくるかも子等は
川端千枝

うつりゆく時世ときよといひてやむべしや事険しくもなりまさり来つ①
大橋松平

腕相撲われに勝ちたる子の言ひて聞けば鳴きをり簾の梟⑥（角川文庫）
宮柊二

右幕下の社参を云ひて行く如き正月人の見ゆる道かな②⑧
與謝野晶子